

[東アジアの金銅仏展によせて]

## 古代日本と韓国・中国の金銅仏

—東アジアの共通言語として—

間もなく西暦2000年を迎えようとしている今、1000年代と2000年代の繋ぎ目という歴史的（年表的？）出来事に偶然にも出会っていることが何か神秘的にすら思えます。古代は益々遠くなって行くように思われますが、逆に、古代の仲間入りをするものは数を増します。「古代」と称される年代が徐々に拡張されるのですから。

日本の美術史で言う「古代」は普通、仏教伝来の頃より始まってそれを「飛鳥時代」とし、それ以前の「原始時代」と分けています。「古代」の終りは「平安時代前期（弘仁・貞観時代）」で、仏教伝来以来ここまでは、日本が絶えず外国文化（特に韓国・中国の仏教文化）の影響を受けながら成長していた時代です。（続く平安後期＝藤原時代はそれに対して、外国の影響を庶断し、国風文化を育んだ時代で、「中世」に入ります。）

従って、飛鳥時代こそは古代の文明開花の時代で、仏教を伝えた韓半島の百済がその重要な役目を果たしました。韓半島にとっての精神的・文化的支柱として根付いていた仏教のシンボル、仏・法（経典）・僧が聖明王の使者によって齎らされたと言われています。今から1500年ほど前の欽明天皇13年

青銅如来坐像 中国・北魏 佐野美術館



（1552年、別に538年説あり）、飛鳥（明日香村）の大和朝廷における出来事です。百済としては高句麗・新羅と共に三国が鼎立して、それぞれに半島統一を目標でいた緊張の時代であり、中国の唐と組んで勢力を得ていた新羅に対向するために、日本に軍事援助を求め、その代償としての仏像等の献上と考えられています。

『日本書紀』の記事には、この時の仏像が金銅仏であり、欽明天皇が「西蕃（にしのとなりのくに）の献れる仏の相貌端厳し。全ら未だ曾て有ず。礼ふべきや否や」と問うた<sup>と</sup>とあります。金銅仏が仏像中の最高のものでとされていた証しです。そして、日本人の未だ曾て見たことのない美しい（人間）像であったのです。

その後の紆余曲折の後、日本人は仏教を取り入れ、仏教伝来の約500年後の607年に最初の仏像が造られました。それは金銅仏の大像でありました。現在の飛鳥寺安居院に残る大仏で、元は三尊像であった可能性も考えられています。

以来、高価な材料と手間をかけて主に蠟型鑄造で造られた金銅仏は時代の主流となり傍流ともなっており、制作が続けられることになりました。飛鳥・白鳳・天平時代がそ

金銅釈迦三尊像 法隆寺 国宝



の盛んな時であり、優れた作品が今に伝わっています。飛鳥時代前半は主に韓半島からの指導と影響の下に、それ以後はその母体である中国からの直接の摂取によって日本人の感性をも生かした温和で繊細な仏像が制作されました。

完全な形で残るものとしてのわが国で最も古い仏像一法隆寺金堂本尊釈迦三尊像は、623年止利師作の金銅仏の名品です。止利の率いた飛鳥様式の「父」と称され、面長な箱形の顔や、杏仁（杏の種）形の眼、衣の堅い平板状の表現、中尊の裳懸座、胸前の紐、脇侍菩薩の垂髪がその先端を巖のようにカールさせる表現、天衣を膝前でX字状に交又させ、体側では外に向けて魚の鱗状に凸起を作って段々に重ね、左右正しくシンメトリックに整えている点などが特徴です。この菩薩の特徴は、夢殿の救世観音にも明瞭です。

それらの点は、中国の北魏後半から隋まで（6～7世紀）、また、韓国の三国時代（6～7世紀）の仏像に見られるもので、これら諸外国の影響であることは明らかです。

今回の展示においても中国・韓国・日本の小金銅仏にそれを示しました。X字状や魚鱗状の左右相称の天衣は6～7世紀の東アジア全体に波及していたのであり、当時の東アジアの美術における共通言語だったと言えるでしょう。如来像の裳懸座や胸前の紐も形は種々ですが、それ以来、東アジアを通じて中世まで続きます。

法隆寺本尊釈迦像の胸前を広く

金銅菩薩立像 韓国・三国



開ける着衣法は中国で考案された中国式通肩衣ですが、それ以前のガンダーラ以来の胸前を開けない通肩衣は中国仏像の最初期の五胡十六国時代に始まり、韓国三国時代を経て、日本では白鳳時代（7世紀後半）に多く現われています。

如来像とは異なって、装飾が多い菩薩像においては、先述の天衣の形状と共に頭飾、頸飾（首飾り）、胸飾、体軀の太・細の違いが、時代の推移と共に現われて来ます。天衣はもはやX字状や魚鱗状を失い、自然に体側に垂れ、正面では上下二段のU字形を為します。装飾は豊かとなり、多様な組み合わせが展開します。中国の東魏から隋・唐に至る溜息の出るような見事に華麗な菩薩の石像群が近年山東省を中心に発掘されて、2年前は台湾の故宮博物院で公開され、今年の7月からは3年前に発掘された山東省随一と誉れの高い石仏群の展示が北京の歴史博物館で開かれています。（11月9日まで）。それらの菩薩像の装飾瓔珞の形式分類を綿密に行うことによって中国・韓国・日本の菩薩像研究の貴重な資料が出来るでありません。今回展示の菩薩像もそのような見地から、瓔珞の多様性を見ていただけよう配慮して選びました。小像ではありますが、手や体軀のポーズは次第に動きを見せ始め、それにつれて瓔珞への関心は一旦、薄れて行きます。

（村田靖子）

金銅菩薩立像 中国・唐 個人



季刊 美のたより No.128

平成11年 8月19日

発行 大和文華館